

# 嵯峨行ききの記

——六月十一日——

幼児數 七十三名 嫗姆 六名 校長

嵯峨行きも前から問題になつて居たけれども、まだ、幼兒のなれないため、實行しかねて居たのであつた。大分歩行も出來電車の上り下りも練習が出來たので愈々行くことにした。豫定の日は來た。好天氣で都合よし、八時半出門する豫刻であつたが、來ぬ兒を待ち合せたり、辨當やお菓子の袋などを、背に負はせたり、腰に下げたり、はき物を調べたり、便所へ行かせたり種々の注意をして居るうちに九時になつて出門した。

嵐山電車場迄では凡そ十町餘もあるのを徒歩せしめ割合に早く三十分位で行き著いた、直ちに電車に乗ることが出來た。例の如く、半は腰掛の上に立たしめ半を腰掛けしめて保姆や附添の者は中央に立つた。此の電車は貸切が許されないので他の乗客も七

## 京都日彰幼稚園

八人のつて居たために、可なり窮屈であつた。「頭を出してはいけない」の、「手を出してはなりません」の「風に帽子をさらぬ様」その注意が度々あつたが、すぐに忘れるので困つた。腰掛けして居る子供はほとんどなく目的地に著くのを待つた居るが、立つて車外を見て居るものは中々やかましい、一寸のものも見のがすまいとお互におしやべりしてゐる。重り合ふ西の山々は綠濃く、間近に見えて圓満な形はゆつたりと心に感じる、畑は若苗ばかりで所々に麥が黄ろく見ゆるばかりである。壬生、三條口、兩院、蚕の社、太子前、嵯峨、嵐山の順で目的地に到達した丁度三十分かゝつた。他の遊覽者は實に少ないもので、園兒の嵐山と云つていゝ位静かであつた。白いエプロンのお揃をかけた可愛い兒等が列をそろへて軽い足どりで松並木の間を行くのがどんなにふさはしいものであつたらう。新緑の蔭、若葉の匂、身に

快よい氣温、實に萌え出づる初夏ほど心よいものはないと思つた。幼兒等も其の快さに氣もそるよろこび勇んで歩む渡月橋にかゝる、橋上より左右を眺めて雑談一しきり、「彼の山に上るのですか」、「彼の舟に乗せてくれるのどすか」とか、「魚がたんと居る」、「魚つりしていやはる私らもつり度いな」とか氣の早い兒は、「どこでお辨當食べるのです」なんて心配して居るものもある。かくして暫、橋を渡つて左へ行く。中之島公園と云ふ、共同休憩所にて持參の包などを下らしめた時は十時一寸過ぎだつた。汗ばんだ顔を拭はしたり、便所へ行かしたりして、暫休憩せしめて後又列をそろへて虚空藏さんへ行く。中の島公園を出て左へ坂道を一町、石段を右へ上れば本堂へ達す。十三まわりには必ずこゝへおまわりして智恵をもらう習慣になつてゐるので、皆かしこくなるやうにと禮拜した。左手の森の中をあさり歩くもの、日露戰の記念碑の所へ上つたり降りたりするもの、大砲をおもちやにするもの、思ひ思ひに遊んで小半時過ぎた。横道より下りて元の公園へ歸つて休憩した。時に十一時であつた。「お菓子を食べても宜しいか」なんて尋ねてゐる兒もある。一人が言

ふどあつちからもこつちからも聞えて来る、それで、もうちぎほんですから少しだけ食べてをくことを言つてやつたら、皆「うれし〜」と各々の袋から出して食べ始めた。その中にお茶もわいて用意が出来たから、お辨當を開くことにした。其のよろこびは何にたとへんやうもない。やつぱり食べることより以上にうれしい事はないものゝ様である。一間の腰掛を六七部に分けて坐する者、腰をかけるもの、それ／＼席が定まる。一人辨當が無いと云つて半泣きになつてゐる。それは来る道で保姆がおすしづめの折を拾つて持つて居つた。「これは誰のですか」と度々きいても誰もどりに來なかつたから、「他の遊客のかしら」と言ひ合つてゐたのであつた。背に負つてゐたのがすりぬけてゐるのを知らずに居たので大笑だつた。一通り皆の辨當をあらため見た。大抵は日々用ひて居る辨當箱に日常とかはらぬやうにしてある者が多かつた。特に遠足だからと心づくしのおあつらへの折もあつたが、季節柄らとておすし等は上の魚類にあやしいと思ふものがあつたから、それは取りのけて食べるやうにしてやつた。「おあがりなさい」「いただきます」の挨拶あつて、よろこびに満ち

た顔つきで食し始めた。食後お茶がよく飲まれた。廣い場所ので三々五々むつまふて何をするとはなしに遊ぶ。或は魚つりを見たり、川へ石を投げて遠くへやりつこをして居るもの、螢をさがしてゐるものもあつた。常においたの大將は、はや川岸へど下りて行つて水を掬つて居た。ならうことなら、皆を川へ下ろして、彼の小魚をすくはしてやつたらどんなによろこぶことかと思つたことであつた。螢を二三匹づゝもつかまへて紙につゝんで居たものも數人あつた。一時間半遊んだ。こんどは龜山公園から天龍寺へ行くことにした。笛をふくと八方から集つて來て身仕度も人手をからず、すばやく出來上り、受持ち保母が直立すると其前にすつと列を作す心うれし。もと來た渡月橋を渡りて左へ約二丁で龜山公園に著く。小高き山をなす所で上るに一寸ゑらいからとて、赤組だけは下の川添を行くことにして、青と緑の組とが上ることになつた。勇氣倍増して、一段二段と上つた。丁度下を見ると赤組の兒が下に見えたので「赤組さん萬歳」の連呼があつた。ずんぐゝ進んで行くのを止めて「もうこゝら迄でにして置きませう」といつて、切かぶや、ペンチに腰をかけて話した。

こゝは赤い松の木が高く、すうつゝと立ち竝んでゐて壯快な感じがする。下を見ると、千鳥が淵である、西にかたむく太陽が向ふの山の若葉のすき間を通じて綠色なす水におちて銀の砂子をまいたやうにきら／＼きらと小波にかゝやいて居る。勇ましいかけ聲そろへてポートを漕いで通る竿さす舟も見える幼兒はぢきに「ポートを漕ぎませう」と歌ふ、木梢にないて居る春蟬の音を聞いては、「夏が來たか」と歌ひ出す。如何に此の美しい大きな自然がこの美しい天真爛漫の子等を抱擁して居るかを思はず居られなかつた。山を下りて來て天龍寺に向ふ。赤組は先きに來て待つて居る。又萬歳をかたみに言ひ交してゐる。何でも萬歳が挨拶の代用となるのである。

天井の龍の畫を見ておどろく。境内には何所かの小學校の生徒が多く來て休憩してゐた。こゝを辭して門を出て左して約二丁、電車は丁度空であつたので走り乗つた。他の乗客は二三人しかなかつた。電車が動き出すと暫くして、コクリコクリと居眠を始めるものが多い。搖籃の心持であらう。グツスリ寝込んでしまつて體は右に左にくの字になつてゐる。上に立つて居るも、中に立ちながらフラ／＼と今にも倒れさうになつてゐるものもある。其の罪のなき又な可可愛いかつた。程なく京都についた。眼を覺まされて目をこすりこすり下りる様子が可愛想にも思はれた。餘り疲勞していけないと云つて電車で歸ることにした。歸り着いたのは丁度豫定の三時であつた湯呑場へ入りてのどなるほさしめて人員を調べた。皆さん大變強かつたでして歸つたら體中をすつかりふいておもらひなさい」と注意して「さよなら」の挨拶で別れた。